

平成11年度

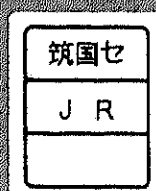
高校生国際協力実体験プログラム 報告書

JICA LIBRARY



1188618 [1]

国際協力事業団
筑波国際センター





目 次

	頁
1. 高校生国際協力実体験プログラム日程	1
2. 平成11年度「高校生国際協力実体験プログラム」参加者リスト	3
3. 高校生国際協力実体験プログラム参加研究員リスト及びグループ別一覧	4
4. 参加校の教諭・生徒の感想文	
① 茨城県立 小川高等学校	7
② 茨城県立 石岡商業高等学校	9
③ 茨城県立 聖徳高等学校	12
④ 秋田県立 能代北高等学校	17
⑤ 福島県立 石川高等学校	20
5. 開発協力ゲームについて	23
6. アンケート集計結果	33
7. 平成11年度「高校生国際協力実体験プログラム」写真集	35
8. 「高校生国際協力実体験プログラム」の新聞報道	47



1188618 [1]

1. 高校生国際協力実体験プログラム日程

実施日：平成11年8月4日（水）～6日（金）

場 所：国際協力事業団 筑波国際センター

第1日目 8月4日（水）

時 間	内 容	場 所
14:00	チェックイン（能代北高校のみ8/3 17:30 IN）	フロント
14:15～14:30	主催者挨拶（鈴木信一所長）	セミナー6
14:30～15:30	プログラム日程説明：（加藤辰三総務課長代理） 引率教師による学校紹介（1校3分以内：アイウエオ順） 1. 茨城県立石岡商業高校 2. 福島県立石川高校 3. 茨城県立小川高校 4. 私立聖徳大学附属高校 5. 秋田県立能代北高校	
15:30～16:30	センター施設見学 管理棟案内：加藤代理 研修棟案内：利光浩三業務第二課長 中野久雄業務第二課長代理	管 理 棟 研 修 棟
16:30～16:45	休 憩	
16:45～17:45	開発途上国の現状と日本の援助について 浅野哲業務第一課長	セミナー6
17:45～18:00	休 憩（運動可能な服に着替える）	
18:00～18:30	日本語研修参加に関する説明 宮本康仁日本語講師	セミナー6
18:30～19:30	日本語研修に参加 宮本康仁日本語講師	セミナー2 セミナー3
19:30～21:00	研修員、JICA関係者、参加者との懇親会（食事付き）	セミナー6
21:00～	花火会	正面玄関前

第2日目 8月5日(木)

時 間	内 容	場 所
9:20~10:00	国際協力に携わって (青年海外協力隊体験談:国内協力員 片山育代)	セミナー6
10:00~10:05	休 憩 (この間に、片山さんの資料を展示する)	
10:20~12:00	開発協力ゲーム:未知の国へJICAから調査団 未知の国:ネパール王国カスキ郡モウジャ村 案内講師:渡辺正夫次長、小林花ジュニア専門員	セミナー6
12:00~13:00	センターにおいて各自昼食	
13:00~17:00	引き続き開発協力ゲーム	セミナー6
17:00~17:30	休 憩 (運動可能な服に着替えて体育館へ集合)	
17:30~19:00	研修員とバレーボールによる親善	体 育 館
19:00~19:30	休 憩 (軽装に着替えてくる)	
19:30~	研修員との懇親会 (食事付き)	セミナー6

第3日目 8月6日(金)

時 間	内 容	場 所
9:30~10:00	開発協力ゲームのまとめ (各グループごとの発表) (司会:加藤代理、指導:渡辺次長他)	セミナー6
10:30~11:45	まとめフォーラム (所長以下管理職出席) グループ意見交換会	
11:45~12:00	閉会の挨拶 (鈴木所長)	

2. 平成11年度「高校生国際協力実体験プログラム」参加者リスト

(参加申込順)

学 校 名	教師・生徒	参加者氏名	性別	担当科目・学年
① 茨城県立 小川高等学校 (〒311-3423) 茨城県東茨城郡小川町大字小川650番地 TEL 0299-58-1403 FAX 0299-58-5769	教 師	伊 藤 栄 一	男	英 語
	生 徒	樫 村 瑞 希	女	2 年 生
	”	神 野 郁 恵	女	2 年 生
	”	中 根 常 美	女	2 年 生
	”	柳 瀬 良 美	女	2 年 生
② 茨城県立 石岡商業高等学校 (〒315-0033) 茨城県石岡市東光台3-4-1 TEL 0299-26-4138 FAX 0299-26-1029	教 師	小 原 恵美子	女	英 語
	生 徒	黒 井 和 仁	男	3 年 生
	”	小 松 克 己	男	3 年 生
	”	原 田 正 博	男	3 年 生
	”	小松崎 直 樹	男	3 年 生
③ 聖徳大学附属 聖徳高等学校 (〒300-1544) 茨城県北相馬郡藤代町山王1000 TEL 0297-83-8111 FAX 0297-83-8116	教 師	三 浦 幸 子	女	英 語
	生 徒	野 口 陽 子	女	3 年 生
	”	高 木 梨 絵	女	3 年 生
	”	中 里 円 香	女	3 年 生
	”	金 子 久 代	女	1 年 生
”	山 本 玲 子	女	1 年 生	
④ 秋田県立 能代北高等学校 (〒016-0842) 秋田県能代市追分町1番36号 TEL 0185-52-3127 FAX 0185-52-3128	教 師	加 賀 紀 昭	男	英 語
	生 徒	山王丸 絵 美	女	3 年 生
	”	中 川 幸 恵	女	3 年 生
	”	武 田 麻 美	女	2 年 生
	”	村 木 美 沙 子	女	2 年 生
⑤ 福島県立 石川高等学校 (〒963-7854) 福島県石川郡石川町字高田200-1 TEL 0247-26-1656 FAX 0247-26-5918	教 師	松 本 聡 二	男	英 語
	生 徒	荒 川 正 幸	男	3 年 生
	”	小 針 礼 之	男	3 年 生
	”	鈴 木 由 美	女	3 年 生
	”	三 瓶 ゆかり	女	3 年 生

3. 高校生国際協力実体験プログラム参加研修員リスト

名	前	国	コース	担 当
1	Mr. Sydney Madoda DLAMINI	スワジランド	水 管 理	花 井
2	Ms. METREF Bouchra	アルジェリア	水 管 理	花 井
3	Ms. W.M.P.C. PERERA	スリランカ	水 管 理	花 井
4	Ms. Alice Malonzo BRIONES	フィリピン	農 業 経 営	吉 田
5	Ms. Throne Boniface MBUNDUNGU	マラウイ	野 菜 採 種	晋 川
6	Mr. Nageshwar NAYAK	ネパール	野 菜 採 種	晋 川
7	Mr. Shahid Riaz	パキスタン	野 菜 採 種	晋 川
8	Mr. Sigifili MATAIA	サモア	野 菜 採 種	晋 川
9	Mr. Saleh Mefjah Naseib AL-ZUBEARI	イエメン	野 菜 採 種	晋 川
10	Mr. George Jacob Orony ODEDEH	ケニア	灌 漑 排 水	花 井
11	Mr. Kifle Alemayehu TUFFA	エチオピア	灌 漑 排 水	花 井
12	Ms. Hoang Ngan Giang	ベトナム	灌 漑 排 水	花 井
13	Ms. Han, A-Wei	中 国	農 業 機 械 設 計	藤 田
14	Mr. Chen, Hai-Tao	中 国	農 業 機 械 化	藤 田
15	Mr. KANG, Geum-Choon	韓 国	農 業 機 械 化	藤 田
16	Ms. Marissa V. ROMERO	フィリピン	食 品 科 学	吉 田
17	Mr. Javier Fernando Adur	アルゼンチン	生 命 工 学 研 究	新 谷
18	Mr. Dang Yong	中 国	生 命 工 学 研 究	新 谷
19	Mr. Gustavo Adolfo Serrano Lozano	コロンビア	生 命 工 学 研 究	新 谷
20	Ms. Minoba Yonzon	ネパール	生 命 工 学 研 究	新 谷
21	Mr. Gustavo Almada Samudio	パラグアイ	生 命 工 学 研 究	新 谷

バレボーリングと日本語クラス

Bareboru chiimu to Nihongo kurasu

Gurupu to kōko no sense	Kenshuin	Kokose	NIHONGO KURASU
<p><u>A</u></p> <p>kiiro 黄色 yellow</p> <p>Ms. Obara Emiko</p>	<p>Mr. Sydney Madoda Dlamini</p> <p>Ms. Metref Bouchra</p> <p>Ms. W.M.P.C. Perera (Purimari)</p> <p>Mr. Mohamed Aly Ould Chekh Ahmed</p> <p>Mr. Khair Al-Amin</p>	<p>Mr. Komatsuzaki Masaki</p> <p>Ms. Nakazato Madoka</p> <p>Ms. Suzuki Yumi</p> <p>Ms. Muraki Misako</p>	<p>Nihongo kyōshi: Ms. Yoshida</p> <p>Asako</p> <p>Seminar room 3</p>
<p><u>C</u></p> <p>ao 青 blue</p> <p>Mr. Ito Eichi</p>	<p>Mr. Teshome Atnafie Guyo</p> <p>Ms. Alice Malonzo Briones</p> <p>Ms. Throne Boniface Mbundungu</p> <p>Mr. Nageshwar Nayak</p> <p>Mr. Shahid Riaz</p>	<p>Ms. Yanase Yoshimi</p> <p>Ms. Noguchi Yoko</p> <p>Mr. Arakawa Masayuki</p> <p>Ms. Nakagawa Yukie</p>	<p>Seminar room 3</p>
<p><u>D</u></p> <p>chairo 茶色 brown</p> <p>Ms. Miura Sachiko</p>	<p>Mr. Sigifili Mataia</p> <p>Mr. Saleh Mejjah Naseib Al-Zubeari</p> <p>Mr. Kifle Alemayehu Tuffa</p> <p>Ms. Hoang Ngan Giang</p> <p>Mr. Chen Hai-Tao</p>	<p>Ms. Kaneko Hisayo</p> <p>Ms. Sannomaru Emi</p> <p>Ms. Nakane Tsunemi</p> <p>Mr. Harada Masaki</p> <p>Ms. Sanpei Yukari</p>	<p>Nihongo Kyoshi Mr. Miyamoto</p> <p>Yasuhito</p> <p>Seminar room 4</p>
<p><u>E</u></p> <p>midori 緑 green</p> <p>Mr. Kaga Noriaki</p>	<p>Ms. Han A-Wei</p> <p>Mr. George Jacob Orony Odedeh</p> <p>Mr. Kang Geum-Choon</p> <p>Ms. Marissa V. Romero</p> <p>Mr. Gustavo Adolfo Serrano Lozano</p>	<p>Ms. Takeda Asami</p> <p>Ms. Takagi Rie</p> <p>Mr. Kobayashi Katsumi</p> <p>Ms. Kashimura Mizuki</p>	<p>Seminar room 4</p>
<p><u>B</u></p> <p>aka 赤 red</p> <p>Mr. Matsumoto Soji</p>	<p>Mr. Javier Fernando Adur</p> <p>Mr. Dang Yong</p> <p>Ms. Minoba Yonzon</p> <p>Mr. Gustavo Almada Samudio</p>	<p>Mr. Kobari Noriyuki</p> <p>Ms. Jinno Ikue</p> <p>Mr. Kuroi Kazuhito</p> <p>Ms. Yamamoto Reiko</p>	<p>Nihongo kyōshi Ms. Tomimura</p> <p>Mayumi</p> <p>Seminar room 2</p>
		Ms. Hasegawa Aya (TBIC Intern)	

4. 参加校の教諭・生徒の感想文

高校生国際協力実体験プログラムに引率参加して

茨城県立小川高等学校 教諭 伊藤 栄一

最初にこのプログラムに招待して下さった JICA に感謝致します。引率した生徒そして私自身にとっても今回のこの経験によって JICA の存在、そして青年海外協力隊の活動がより鮮明なものとなりました。

開発途上国への援助についての講演は、私たちが日常新聞・テレビからしか得ていない海外情勢の問題点をより直接的なものと感じさせてくれたし、青年海外協力隊員としての若い講師の生の経験談は感受性豊かな生徒にとってかなり刺激的なもの様でした。さらに海外研修員と直接触れる事ができた日本語研修、レクリエーション、夕食時の懇談会における生徒は最も生き生きとしていました。このことから若い生徒達がより広い世界に興味を持ち、よりインターナショナルでありたいと願うのはほとんど本能的な欲求であると言うことを改めて感じさせられました。このような生徒の姿を見ると、私たちの教室の授業がどれだけ彼等のこの欲求を満たしているのか反省させられます。

今回のメインプログラムとも言える開発協力ゲームの実践は、教室における教科書中心の授業とは異なった疑似的に JICA の活動に参加する、積極性が要求されるものでした。

しかしながらこのプログラムが私たち先生も生徒もふだん余り経験のないディスカッションを基盤としたものであり、メンバーがお互い余り気心も知らないというせいもあって、グループによってはかなり指導者の指示を仰がざるをえないようでした。

ディスカッションは我々日本人にとっては苦手なように思われる。ただ自分の意見を繰り返し述べるだけか、あるいは他と意見が異なっている場合は沈黙を守ってしまう。自分と他の意見が本来異なるのが当然であると言う考え方にはなじまない。自分の意見を述べ、自分と異なる他の意見に耳を傾け、さらに自らの考え方を発展的なものにしようという訓練に今一つ欠けているように思われます。これは私たちの学校教育のウィークポイントの一つでもあります。この開発協力ゲームにおいてもそのような傾向は見られ、実際各グループのまとめも討論を重ねて練り上げられたと言うよりも、比較的積極的な数名の生徒によってその発表内容が形造られていった。しかし見逃してならないのは生徒たちはディスカッションは苦手ではあっても、それはただその経験が不足していることとそのノウハウを知らないからであって、生徒たちは他と話し合ったり意見の交換をしたりすることに興味・関心を持ってはいるように思われます。そのことを生徒たちそして私たち指導者もこの開発協力ゲームの実践によって認識することができたのではないのでしょうか。そのことはこのゲームが開発青年協力隊の存在、その実践していることに目を向けてくれたことと同様に大切なことと思われます。

プログラムに参加して

茨城県立小川高等学校 二年 櫻村 瑞希

私はこの「高校生国際協力実体験プログラム」に参加することができ、本当によかったと思います。どんな面で良かったのかというと、一つは「開発協力ゲーム」に参加できたことで、もう一つは研修員の方々と交わられたことです。

私はこのプログラムに参加する前は、ほとんど国際協力は関心がありませんでした。プログラムに参加しようと思った理由も、外国の人と話ができると聞いたからで、国際協力に直接興味を持っていただけではありません。しかし、講師の方からネパールの話を聞いているうちに、国際協力への関心を深めることができました。「開発協力ゲーム」では、ネパールのカスキ郡モウジャ村についてたく

さんのことを知りました。中でも、多くの子供達が学校へ行くことができないという実状にびっくりしました。日本は、義務教育が9年間あり、100%近くの子供が中学校を卒業しています。しかし、ネパールでは、中学校を卒業する子供が50%を満たしていません。学校が少なかったり、お金がなくて子供を学校に行かせてあげられないことなどが理由なのだそうです。私は日本人に生まれることができて幸せでなあ、とつくづく思いました。普段、このように海外についてじっくりと考えたことがなかったので、私はこの国際協力のプログラムに参加できたことをとても感謝しています。他の学校の生徒さんたちや先生とも協力してプログラムを進めることができて良かったです。

一日目は日本語研修と懇親会、そして二日目はバレーボールと懇親会を通して研修員の方々と親しくなることができました。懇親会の後も研修員の方々とスポーツやダンスなどをして楽しみました。時間を忘れてしまうくらい楽しかったらしく、気が付けばあっという間に夜中の11時や12時でした。研修員の方々はとてもやさしく、廊下ですれ違った時などにも気軽に声をかけてくださいました。その時はしどろもどろになってしまい、上手に英語で話せなかったのも、もっと英語を勉強して、ペラペラ……とまではいきませんが、少なくとも今よりはスムーズに会話できるようになりたいです。

国際協力について

茨城県立小川高等学校 二年 神野 郁恵

私は、友達がイタリアへホームステイに行くという話を聞いてから、私自身、すごく外国に興味を持ち始めました。そのころ、このプログラムの話を聞いて、英語嫌いの私が、“参加したい”と思い、参加することを決めました。そして、このプログラムに参加して、本当にいろいろな知識を得ることができました。

まず一つ目は、開発途上国についてです。私は、日本以外の国だと、観光地や、テレビで見たことのある国ぐらいしか知らなかったし、観光地以外の国へ行きたいとは、思ったことはありませんでした。しかし、開発途上国のことの話や、研修員の国の話を聞いて、世界が広く感じ、いろいろな国へ行ってみたいし、本屋にある外国の本、旅行代理店のパンフレットや、テレビなど、よく目が行くようになりました。そして、たくさんの国に興味を持つようになりました。

次に、二つ目は、青年海外協力隊員についてです。青年海外協力隊員とは、「殺された」というニュースをよく耳にします。だから危険だというイメージがありました。しかし話を聞いて、世界で違う国の人のために、役に立つのは、すごくあこがれを持ちました。私も、青年海外協力隊員のように、人を喜ばせ、笑顔と幸せがいっぱい増えるような、人の役に立つ仕事をしたいと思いました。

本当に、この貴重な体験に参加できてよかったと思っています。ふだん交流のない、外国人の人たちと、話したり、スポーツをしたり、食事をしたりと、いろいろと楽しめました。外国に対する興味は、一時的なものだと言われぬように、英語を勉強し、外国人との交流をたくさんしたいし、世界各国へ行き勉強したり、人の役に立ちたいと思っています。

国際協力について

茨城県立小川高等学校 二年 中根 常美

私は、『高校生国際協力実体験プログラム』に参加して、国際協力についての考え方が少し変わりました。

私は、国際協力をするような人は、天才的に頭が良くて、体力も人並み以上でというイメージがありました。でも、今回のプログラムに参加して、国際協力という事は、自分の出来る得意な事を活かしてでも出来るという事を知りました。

例えば、体育・柔道・空手・卓球・私が小さい頃にあこがれていた幼稚園の先生など、国際協力をする人（青年海外協力隊）の募集職種としてたくさんあります。

私が始めにいただいていた、青年海外協力隊へのイメージ、『天才的に頭が良い』ということ。『体力が人並み以上ある』、なんだか普通の人じゃなく、特別な人しか青年海外協力隊になる事が出来ないかのように思います。

でも、自分で「国際協力したい」と思えば協力出来ると思います。

しかし、他の国の言葉を勉強したり、体力作りなど、青年海外協力隊になるのは、簡単ではないにしろ、自分で協力したいと思えば他の国の言葉や体力作りなんて、たやすい事だと思えるはずなので、青年海外協力隊になりたいと思ったら、あきらめないで、がんばるべきだと思いました。

国際協力について

茨城県立小川高等学校 二年 柳瀬 良美

私がこの研修に参加の希望を出した理由は、すごく外国の人に興味があったからです。それは、最近日本で外国人を見かけるのがめずらしくなくなってきていて、なぜなにをしに日本に来ているのだろうと考えはじめているからです。そして、筑波国際センターに研修に来ている人達に直接聞いてみたいと思ったから参加してみることにしました。

しかし、実際に参加してみて、外国人の方との交流が少なくとても残念でした。しかし、外国人の方との交流が少なかった分とてもためになる話しを聞け、また体験もできました。その中の体験の中で最も印象に残っていることは、グループに分かれての開発協力ゲームです。

最初私は、ゲームというのでそれほど大変なものではないと思っていました。しかしそれは、実際にそこに行った立場になって何が私たちにできるか考えるととても大変なゲームでした。男女・身分差別や貧富の差について話し合いました。どうしたらその村は発展するかなどとても難しいゲームでした。しかし、このゲームをやってみて日本以外の場所について、ほんの少しだったけれど勉強できて良かったです。

この約三日間でとても楽しかったことは、研修員とのバレーボールです。毎日やっているんだなと分かるようなプレーを見させてもらいました。私たちのチームは残念ながら三位でしたが、とても楽しい思い出になりました。

この三日間でとても良い体験をさせてもらったと思います。来年も同じような企画があったらぜひもう一度参加したいと思いました。

プログラムの総括

茨城県立石岡商業高等学校 教諭 小原 恵美子

私は今までこのようなプログラムに参加した経験がなく、国際協力に関しても知らない事がたくさんありました。参加する前は、指導できるだろうか不安でいっぱいでした。引率の立場ではありますが、とにかく生徒と一緒に学ぶつもりでのぞみました。

実際、施設見学に始まり、開発協力ゲームや講義、懇親会と内容がとても充実しており様々な事を学ぶ事ができました。

生徒達も初めは緊張して表情も硬かったのですが、日本語研修の頃にはすっかりリラックスして楽しそうでした。普段の学校生活で、開発協力について解れる機会はあまりなく自分達にはあまり関係ないような感覚がありますが、直接研修員と話すことによって、ぐっと身近に感じられたと思います。一対一で外国の人と話す機会はめったにないので、どんな内気な生徒でもうちとけて話せる場を作っていた点がとても良かったと思います。その時の会話をきっかけに生徒もどんどん積極的にになり、その後の活動に大きな影響を与えました。

開発協力ゲームは初めどのような活動かわからず、とまどいましたが、自分達で考え、話を進めていくことで受け身ではない学習ができたと思います。青年海外協力隊の体験談は活動に密接に結びついているため、頭にすんなりと入りやすく、いきいきとその様子が目に浮かぶようでした。高校生の時にこのようなすばらしいプログラムに参加できて、生徒達は幸せだと思います。私もこの経験をいかして、一人でも多くの生徒達が国際協力について深く考える機会を持てるように、学校での活動に取り入れていきたいと思っています。

つくば国際センターに行って

茨城県立石岡商業高等学校 三年 黒井 和仁

僕は、先生から言われた時は、何にも考えずにOKしてしまった。実をいうと僕は国際交流はにがてだった。けれど、その時はせっかくだから外国の人と交流を深めて見ようと思った。そして、その日が来た。僕は半分不安だった。それはなぜかと言うとうまく外国人とコミュニケーションがとれるのか少し心配だったからです。

牛久駅についてバスに乗った時に他の学校の高校生がいた。僕は、この人達といっしょにやるのかと思った。そして、つくば国際センターについてフロントに行って部屋の鍵をもらって部屋に行き荷物を置いてセミナー6という部屋に行きみんなと対面した。全員で26名で研修が始まった。

まず初めは班にわかれて施設の説明をしてもらいました。そして、部屋に戻り休憩してから開発途上国の現状と日本の援助について話してもらいました。いろんな話をくわしく話してくれたのでわかりやすかったです。そして、次に日本語研修に参加しました。外国の人に質問するのがとてもたいへんだったけどたのしかった。その後、研修員の人達と食事しました。いろんな外国人とコミュニケーションがとれてよかったです。

2日目は、実際に海外に行って国際協力をしてきた人から話を聞きました。とつてもためになりました。そして、開発協力ゲームが始まった。最初は、コンピューターを使ってやるのかと思ったら、班になって議長・書記・発表者をきめて課題をだされて班でまとめて発表者が説明することを何回もやりました。僕は、あまり得意じゃないので班の人に迷惑をかけてしまった。

次に、着替えて体育館に行って研修員の人達とバレーボールをしました。僕らのチームはシードだったので一回勝てばすぐ決勝だったので絶対優勝すると思っていたら、接戦でなんとか勝って決勝にいきましたがあつというまに負けてしまい優勝できなかったのがとてもくやしかったです。

3日目は、開発協力ゲームのまとめをしました。今までやってきたことを紙に書いてはり、まとめてから発表することをやりました。僕は、発表したけどあんまりうまくまとめることができませんでしたがとてもいい勉強でした。終わってみるとこのプログラムに参加してほんとうによかったと思います。

国際協力について

茨城県立石岡商業高等学校 三年 小松 克己

私はこの「高校生国際協力実体験プログラム」に参加して良かったと思っています。それは海外から来ている研修員の人達や他校の生徒たちと交流を深められたからです。初めは、英語が話せないから行きたくないと思っていました。でも実際行ってみると研修員の人達は、ある程度日本語が話せるのでほっとしました。

他にもセンター施設を見てすごいと思ったものもいくつかあります。私が、一番興味を持ったのが化学の実験室です。中には、たくさんの薬品がありこれはどんなものなんだろうとか思いました。テレビとかで薬品を使つての実験とかがあつて、私はその実験をやつてみたいなあとか思つてしまいます。

他にも日本の援助のことや、青年海外協力隊のことで初めて聞くことがたくさんありました。日本は、ただ資金を援助するだけではなく、その国の人達に技術を伝えたりするのです。JICAでは、開発途上国の青年を日本の専門分野に一定期間招いてそれぞれの分野について学ぶと共に、幅広い交流を通じて相互理解を深め信頼と友情を築くことを目的にしているそうです。それと、青年海外協力隊の仕事も大変なようでした。今回私たちがゲームとして行った地域はネパールのカスキ郡モウジャ村についてでした。このゲームは、私たちが、協力隊員としてその村に行つたと仮定してやつたものでした。そのゲームでやつた内容と似たようなことを協力隊はやるそうですが、もっと村人たちのためになるようなことを考えるそうなので、協力隊の人たちはとてもすごいと思われました。

私は、この開発協力ゲームをやつたり、講師の方々の話を聞いて、私たちの年代からもっと海外のことについて興味をもつ必要があるのではないかと思つました。

国際協力について

茨城県立石岡商業高等学校 三年 原田 正博

8月4～6日の間にいろいろな体験ができた。他校の生徒と話し合えたり、研修員の人達と交流すること、そうしたことで3日間はとてもたいへんでもあり楽しかった。

1日目、センターに入る前に、「発展途上国の現状と日本の援助について」という課題で、自分はどう話したらいいのか分からなかった。また、研修員の人達と英語で話したらいいのか日本語で話したらいいのかも分からなくとても不安だった。こうした不安が消えたのは研修員との懇親会だった。どう話したらいいのか分からなく視線をそらしていた自分に、「コンバンハ。」と日本語で話してくれた。その瞬間、不安がっていた自分が恥ずかしく思えた。研修員の人達は日本という国に来て日本語という自分の国の言葉ではない言葉を使っているのに話しかけてきてくれたからだ。

2日目、記憶に残るであろう出来事が2つ起きた。一つは、他校の生徒と発展途上国の援助について、グループになり意見交換をしたことだった。こういう話し合いの場合、自分は今まで聞き手に回つたり、友達と違う話しをしていて意見を言うことはなかった。はっきりいって自分には場違いだと思つた。けれども、せつかくの夏休みを使ってまで来たから少しは将来のために意見を言った。意見を言い終わると、なぜか次から次と意見を言える自分に驚いた。こんなことは今までの人生の中で一度もなかったのが貴重な体験だった。二つ目は、夜中の11時頃一緒に行つた生徒と話していたら、韓国の研修員の人と話しかけてきた。日本語も上手でいろいろな事を話してくれた。自分の国のこと、今どきの高校生のこと、日本の料理のこと、スポーツの話などだ。自分達もいろいろと話しいつ

間にか1時間が経っていた。自分は今まで外国の人と話すのは、せいぜい1分もてばよかったほうだ。まさかこんなに話せるとは思わなく貴重な体験をした。

3日目、すでにこの環境に慣れてしまった自分がいたと思った。通りすがりの研修員の人達に気軽に挨拶ができ、他校との意見交換もできるようになったからだ。

帰りのバスでセンターから出る際、近くを通った研修員の人達が手を振っているのを見た自分は、この3日間が人生に残る出来事だったと思った。

国際協力実体験プログラムについて

茨城県立石岡商業高等学校 三年 小松崎 直樹

正直言って僕はこのプログラムにはまったく関心がありませんでした。ただ夏休みの行事だと軽い気持ちでいました。

でもいざ始まってみると意外におもしろそうだという気持ちが徐々にふくらみました。

日本語を研修員といっしょに話してみると、とても日本語が上手で予想以上に会話がはずみ貴重な体験ができ、違う国の人達と一つのグループができたようでとても楽しく、充実した体験だと思いました。

でも一日目はうまく楽しくすごせたけど、僕は二日目心配でした。それは知らない人といっしょにグループ作業を行うプログラムでした。最初はぜんぜん会話がなく、めっちゃめちゃでまとまりがぜんぜんなかったので、より一層心配になりました。しかし、みんな、これではいけないと思ったのが自分がリーダーのつもりで積極的な行動をとるようになり、少しずつグループという形になっていき、駄目押しにバレーボールをやったことで一つのグループが完成したなど実感しました。

グループがまとまったことで三日目もスムーズに課題をクリアし、まとめフォーラムは二日目とは全く違う気持ちで取り組み非常に貴重な体験ができたと思います。

このプログラムを通して僕は国際交流だけでなく、モウジャ村の人々の苦悩、日本の国際ボランティアの普及、そして一つの目標につき進むグループの強さのようなものを感じた三日間でした。このようなプログラムが小さな子から大人まで気軽に参加できるようになってもらえば発展途上国の現状がわかるし、ボランティアに参加する人が増えると思います。本当に貴重な体験をし自分にプラスになるようなことばかりでした。本当楽しかったです。

国際協力体験プログラムに参加して

聖徳大学附属聖徳中学校高等学校 教諭 三浦 幸子

はじめに

昨年の夏、国立磐梯青年の家で行われた「高校生国際理解のつどい」に生徒4人を引率して参加しました。また秋には、国際センターでの「高校生のために地域市民講座」に6人の生徒と参加し、このような研修ならびにJICAの活動から生徒が得られるものがいかに大きいかは実感していました。今年はこのプログラムへの参加のお誘いをいただき、参加する生徒にとってもまた自分自身にとっても多くを学ぶよい機会になることは確信していました。実際、2泊3日の研修はその予想以上に有意義なものとなったと思います。

研修プログラムについて

1. 事前学習：

内容が生徒の自主的な活動主体となることは予想できていたので、事前指導の必要性については一考しました。しかし時間の関係もあり、結局は、オリエンテーションを行い、手持ちのJICA関連の資料のコピーを渡すと同時に関連と思われる書籍の紹介をして事前学習の必要性を伝えたものの、後続指導は行えず、参加生徒個人に任せるという形となってしまいました。その後、夏季休業に入ってから関連資料の冊子をいただき、参加生徒に渡す際に再度確認しました。夏季休業直前にはなかなか時間がとれずらいこと、また夏季休業に入ると生徒とも連絡が取りずらいという点にご配慮いただき、事前学習として望ましいことを示唆していただけたらと思います。

2. 講演：

浅野業務1課長の講演「開発途上国の現状と日本の援助について」では、具体的な例を参考にしながら、開発途上国のイメージをつかむことができたと思います。タイとケニアについて、その地理・経済・教育・文化の情報とその問題点をうかがい、日本との相違点を考えるとともに、あらためて日本を見直すことができたでしょう。また「援助」についても、ご本人の経験を基に、その理念と「我々が今できること」を考えさせられ、これから「開発協力ゲーム」を行うにあたって大変よいヒントを多く得られることができました。3日間のプログラムを通しての一貫した主旨が感じられました。

3. 日本語研修・研修員との懇親会：

オリエンテーションや施設見学の時の生徒の様子では、随分おとなしいと印象が残り、今後の活動にどの程度積極的に参加できるのか懸念した部分もありました。しかし、日本語研修での生徒の姿はその心配を払拭してしまうほど元気なものでした。ペアワークによる研修員との日本語のやりとりで、生徒たちの意欲が喚起されたと思います。語学教育に携わる者として「コミュニケーション活動」の大切さを再認識させられました。この日本語研修の機会が第1日目、それも研修員との懇親会の直前に組まれていたことが今回のプログラム全体がより活性化される鍵になったと思います。

4. 講演「青年海外協力隊員として国際協力に携わって」：

片山育代さんのエクアドルでの協力隊員としての体験談は、協力隊としてのプロジェクトだけでなく、個人として苦労なさったことにも触れられ、興味深く聞ける話でした。映像を交えながらだったので、現地での生活のイメージもつかみやすかったと思います。成功談ばかりでなく、実際に現地に行ってみて気づき、見直しが必要だった点なども話していただき、片山さん自身が現地の人々と交流しながら成長していく過程が実感できました。特に印象的だったのは、エクアドルの女性の1日の生活の流れを知ったときに、彼女たちにとっては協力隊との活動は負担になるということを考え、皆がその意義を理解できる活動を再考したという話です。また片山さんが接した人々の中でも都市部のエリートと農村部の人々の間には価値観や生活様式の違いがあり、単純に「エクアドル人」として決めつけられないということもわかりました。このお話もその後の「協力ゲーム」への大きなヒントとなっていたと思います。

5. 開発協力ゲーム「未知の国へ」JICAから調査団：

明確なねらいのもと、大変綿密に計画され、充実した内容になりました。

いくつかの段階を追って、生徒たちがグループ毎に「なぜ調査するのか」、「何が問題なのか」、また「今何ができるか」を考えていく過程の中には多くの発見があったと思います。複数の国ではなく、ネパール王国カスキ郡モウジャ村と対象を1つに絞ったことでより多様な活動と意見交換が可能になり、内容も濃いものになったのではないのでしょうか。活動は基本的に生徒の自主性にまかせるということで、途中必要に応じてうまく軌道修正しなければならないこともあり、担当の渡辺次長、小林さんの役割は大変大きいものだったと思います。準備の周到さばかりでなく、その過程で

のご配慮と柔軟な対応に感謝するばかりです。

今後の指導・学習について

「国際化」という言葉はよく聞かれます。高校生の海外研修も盛んになりました。しかし、その多くは英語の語学研修を念頭に入れた欧米を対象にしたものです。それだけで本当に「国際化」と言えるのか、疑問に感じます。今回のプログラムに参加して、研修員の方々と交流したり、協力隊の経験話をうかがったりする中で、生徒たちも「国際化」や「地球」ということについて新たに気づくことがあったにちがいません。私たち教師も授業で扱う内容を考える場合にこの点に留意しなければならないと思います。

新学習指導要領で「総合的学習の時間」が大きく唱われています。これは生徒たちが実際に調査や体験をしながら変化への対応能力、問題解決能力、実践力を培っていくことを目的としています。今回のプログラムで体験した「開発協力ゲーム」は、内容もアプローチも、「総合的学習」を考えるうえで大変参考になるものでした。

個人的には、自分の担当している「外国事情」の授業で「調査・発表学習」や「問題提起・解決学習」に近いことは既に行っていますが、今後さらに幅を広げ、生徒たちが地球市民という立場で、自分たちの「問題」としてとらえ、「今自分たちができること」を考えていけるように発展させていきたいと思います。「開発協力ゲーム」を担当なさった渡辺次長がご指摘されたように、このような活動を行う際にはモデレーター役が大変重要なものとなるでしょう。学校で実践にうつす場合、教員側の研修の必要性も大きいと感じています。

おわりに

最後になりましたが、このプログラムを通じてお世話になりました職員の方々、研修員の皆さんに心からお礼をもうしあげます。貴重な体験をどうもありがとうございました。

国際協力について

聖徳大学附属聖徳高等学校 三年 野口 陽子

今回、私はプログラムに参加し、多くの事を学びました。中でも、国際協力の一つである開発協力についての話し合いは、とても興味深いものでした。

途上国の人々が、私たちに求めているものの、または、私たちができる最善の援助という私たちのは、はじめ金銭的な事にばかり目を向けてしまいました。確かにお金があれば、生活が便利になり、多くの問題も解決されるというのは事実です。しかし、生活が豊かになり、物欲が満たされただけでは、人々が幸せになれるとは限らないということに気がつくことができました。そして、以前ビデオで見たマザーテレサの言葉を思い出しました。豊かなイメージの強いアメリカ合衆国でマザーは「この国も飢えがある。人々の心が飢えている。」と言いました。

開発協力ということで、その国の問題点に目を向けることも大切なことですが、その国だからこそある民族独特の文化や、生活習慣などを見直して尊重し、それを生かすということも、とても大事なことだと思います。

現地での協力は、文化や生活習慣、ましてや言葉もろくに通じないともなると、とても困難なものだと思います。しかし、そこで私たちが少しでも相手と分かち合いたいという態度で臨むことで、現地の人々と一体となり、言葉や文化の違いというハードルを越えて、それ以上のコミュニケーションが、はかれると思います。そして、人々にとって一層大きな成果をあげられると思います。

また、協力隊の方々から、手芸が得意な人は民族的な刺繍を伝える協力をしたり、サッカーが得意な人はサッカーを教えるというような、自分の特技を生かした協力ができるということを知り、私たちにとっての「国際協力」がより現実的なものを感じました。今後途上国への関心がより高まって、開発協力もより活発なものになれば良いと思います。

国際協力ということ

聖徳大学附属聖徳高等学校 三年 高木 梨絵

8月4日から2泊3日で筑波国際センターに行きました。まず始めに私が驚いたことは、筑波国際センターでたくさんの外国人の方が勉強しているということでした。私は「うまく外国人の方々と話せるのかな？」と、とても不安になりました。でも夜に研修員との交流会があり、そこでなれない英語を一生懸命使い、なんとか話すことができました。その時、とてもうれしく感じました。

二日目には、各グループに分かれて、開発協力ゲームをしました。その内容は、ネパール王国カスキ郡モウジャ村についてでした。私達が普段あまり考えないことなので、とても難しく感じました。モウジャ村は、全人口2,817人しかいない、とても小さな村です。宗教は主にヒンズー教で次に仏教です。そして、部族構成は、バフン族・グルン族・ネワール族やマガール族などです。ネパールには問題がありました。それは、男の人は出稼ぎに行き、女の人が子供の世話や家事などを行っています。しかも女の人がご飯を食べる時、先に子供や夫に食べさせてから、自分が食べます。だから、ご飯がなくなってしまう、食べられない時もあるのでしょうか。そんなこともあってネパールの女の方は、男の人より寿命が短いのです。日本と反対なので、とても驚きました。私は、ほんの少しだけど、ネパールについて知ることができて良かったと思いました。はたして、ネパールは不幸せで日本は幸せと言えるのでしょうか。ネパールは確かに学校もないし、病院もありません。しかし、ネパール人の心はとても暖かいものだと思います。それに対して日本は、何の不自由もなく生活を送ることができます。しかし、最近ニュースでハイジャックや殺人などをよく耳にします。私は、日本人の心はネパール人の心より冷たいのだと思いました。単に物があり、何も不自由なく生活できるよりも、人の心の暖かさが大切なのではないかと思いました。この2泊3日、とても貴重な経験となり、とてもうれしいです。ここで学んだことを、学校生活に生かせるといいなあと思います。本当に有り難うございました。

国際協力について

聖徳大学附属聖徳高等学校 三年 中里 円香

3日間の研修に参加して、今まで遠いイメージがあった「国際協力」という言葉に少し親しみを持てた気がします。

私たちは今、生活に不自由することもなく、平和な毎日を送っていますが、「今なにができるのか」を考えさせられた貴重な時間を持つことができました。

研修の中でも特に「開発協力ゲーム」が印象に残っています。未知の国のことについて色々な角度からグループで話し合いながら進めていく中で、「国際協力」について考えが変わりました。

私が思っていた国際協力とは、日本のように経済的に豊かな国が開発途上国に一方的に経済的な支援をしているようなイメージがありました。しかし、お金や物をあげたりすることだけが国際協力な

のではなく、お互いの国や文化について理解したうえで、コミュニケーションをとることが大切なのだと思われました。もし私とその国の人々の立場になった時、確かに、設備などの面で困ることもあるかもしれないけれど、その中でもそれなりの楽しさもあると思います。私たち日本人の観点から「貧しい」とか「つらい」と決めつけてはいけなとを考えさせられる一面もありました。そして、その中でも確かに現実問題として現地の人々が本当に困っている事について「私たちにできること」をしていくことが私たちの役目だと思いました。私たちの考えを一方的におしつけるのではなく、開発途上国の方々に少しでもプラスになるよう、技術も情報も考えの一つとして提供して、それが今よりさらに暮らしやすく楽しい日々が送れるようになるのならお互いに嬉しいと思います。

「今の私にできること」を日々、見つめながらこれからも、なんらかの形で協力できたらいいと思っています。

国際協力とは？

聖徳大学附属聖徳高等学校 一年 金子 久代

私はこの実体験プログラムに参加して本当に良い体験ができました。参加する前は「日本では…」という考え方で物を見がちでしたが、今は「この国だから…」という考え方ができるようになったと思います。私は小学校6年生の時から、将来は青年海外協力隊として開発途上国の人々と触れあいたいと思っていたので、OBの方々のお話はとても勉強になりました。

「開発協力ゲーム」をはじめた時、私が一番気になったのは差別（身分差別や男女差別）についてです。私個人としてはどこでもみんな平等だということを知ってもらいたいとは思っています。しかし、同時に、その国々の宗教や習慣も尊重しなければ、こちらの考えを押しつけるだけになってしまうことに気づきました。また、先進国側が便利ということで行っていることによって環境問題などが起こり、それはその国単位ではなく、地球単位に悪影響が及ぶということを知って、国際協力とは、その地に行くことだけではなく、遠く離れた所にも意識できることだと思いました。

私が三日間の中で一番楽しかったのは、研修員の方々との懇談会でした。はじめはあまり自分から話しかけられなかったのですが、皆とても明るく、優しい方々ばかりだったので、すぐ話せるようになりました。ただ自分がもう少し英語をうまく使えたらと思いました。これからは日本語で通じない分を補える語学力をつけたいと思います。

この三日間で学んだことが多かった分、そのことをまわりに伝えたり、自分でもっと深く考えていこうと思います。本当に良い体験をさせていただき、ありがとうございました。また機会があったらもう一度参加したいです。

国際協力について

聖徳大学附属聖徳高等学校 一年 山本 玲子

最近、よく聞く国際協力。私は、国際協力というものは、例えば、貧困に苦しむ国や災害に困っている国を他の国々が救援物資などを送り、現地で困っている人たちを助けるだけだと思っていた。しかし実際には、国際協力とは前記に書いたことよりもずっと大変なことだと思った。

貧困、災害によって、生活に必要なものが無く、みんなが困っている。そんな時、その国に派遣された人たちは、生活していくのに最低限必要なものを作ろうとみんなに呼びかける。

しかし、その国には、その国の伝統的な文化や宗教などがあり、一方的に、「私の国ならこうする。だからあなたたちもこうなさい。」

とは言えない。それは相手の国の文化や宗教を尊重しないでただ、自分の国の文化や価値などを一方的に押しつけているものであり、現地に住む人たちを混乱させるだけで何も前へ進まない。大切なことは、相手の国の文化や宗教を理解しながら、どのようにうまく物事を進めるかということである。

言いかえれば、現地の人たちと協力し合って何かを作り、その結果、生活に困っていた人たちの生活が少しでもよくなり、また、派遣された人たちが帰国した後も、一緒にしてきたことを忘れずに、それを土台として、自分たちでよりよい生活環境を作ってほしいということだ。

協力とは、一人一人が相手のことを理解し、助け合い、その理解の輪を広げることが国際協力だと私は思う。

プログラムの総括及びこれからの開発協力への取り組みについて

秋田県立能代北高等学校 教諭 加賀 紀昭

私たち日本人は「外国人」と聞いて真っ先にどこの国の人を思い浮かべるだろうか。私が受け持ってきた生徒のほとんどはまず英米人を思い浮かべるようである。私自身にもそういう面があることを認めなければならない。日本人には一般的にそういうところがないだろうか。私たちが思い浮かべる「外国人」はみな英語を話す。生徒達の多くは修学旅行等で「外国人」を見かけると英語で話しかける。その人がフランス人かドイツ人かなどということをもまず考えない。

世界の総人口を100人だとすると北アメリカに住む人は5人なのだという。同様に換算すると日本人は2人、アジアに住む人は59人、アフリカに住む人は13人となるそうである。そして字が読めない人は50人、学校に行ったことのない人は15人、発展途上国の人口は78人になるという。この数字をどうみるだろうか。私自身こういうことについて意識的に考えてきたとはいえない。

みなさんは字が読めない人に会ったことがあるだろうか。私は1人だけ会ったことがある。私が幼い頃母がとある旅館に勤めていたのだが、そこに一緒に勤めていた人は字が読めなかった。初めは事情が理解できなかった。その人と一緒に買い物にいった時のことを今でも鮮明に覚えている。その人はどの品物を手にしても店員に値段を尋ねていた。そこに値札がついているというのに。その当時の日本の識字率が何%かは知らない。現在では99.9%だと聞く。ずっと忘れていたのだが、今回のプログラムに参加してこの人のことを思い出した。

今回のプログラムに参加し私自身学ぶことが多かった。生徒達も同じ気持ちであることだろう。なにより考えるきっかけになった。先進国と発展途上国の格差。すなわち所得の面、識字率、死亡率、平均寿命、就学率、1人あたりの医師の数などなど。一口に「援助」といってもいろいろな形態があることを知った。生徒達と共に本物の「援助」なのかを考える努力をした。プログラムで印象的だったのはなんといっても開発協力ゲームだ。私たちはJICAからネパールのカスキ郡モウジャ村に派遣された。グループのメンバーは榎村瑞希さん、高木梨絵さん、武田麻美さん、小松克己さんの4名。初めて出会った高校生達が協力しあって1つのプランを立てていく姿は感動的なものだった。高校生の持つパワーをまざまざと感じた。

今回学んだゲーム等を授業やHRで実践してみたいと思う。形態は変わるだろうが、取り入れることは十分に可能だ。教師が主導するのではなく生徒達自身の考えを重視する姿勢が特に印象深かった。秋田から9時間程かけてつくば市まで行ったわけだが、貴重な体験のお世話をしてくださったJICAの皆さん、研修員の皆さんに感謝している。

国際協力について

秋田県立能代北高等学校 三年 山王丸 絵美

この地球に住む全ての人々は、平等に幸せを実現する権利があると思います。何を幸せと感じるかは、その人個人が決めることですが、私たち日本人がそれに協力するということは、大変重要なことだと思います。

「国際協力」という言葉をよく耳にしますが、実際それが何なのかと問われても、私の知識はゼロに等しく、自分には無縁のことだと思っていました。しかし、今回この「高校生国際協力実体験プログラム」に参加させていただいたことにより、私の国際協力に対する知識、考え方が大きく変わったことは言うまでもありません。それと同時に、「国際協力」という活動の意味の深さ、大変さを初めて実感できたように思います。

リアルタイムで世界を見ることのできる今、平和な日本に住む私には遠い現実にはかと思えないような映像が、毎日のように目に飛びこんできます。どんな形にしろ、世界にはたくさんの飢えや苦しみがあります。現実とは思えないような現実が、そこにはあるのです。私自身、これまでもそのことに気づいてはいたはずなのに、その問題は自分には関係ない、どうせ自分には何もできない、と逃げていたのかも知れません。このプログラムで学んだことをきっかけに、「今、自分にできることは何か」をもう一度考え直してみようと思います。そして「国際協力」がもっと、自分にとって身近なものになるよう、考えてみようと思いました。

国際協力について

秋田県立能代北高等学校 三年 中川 幸恵

世の中には裕福な人々もいれば貧しい人々もいる。現代を生きる同じ人間なのに何故こんなにも差がついてしまったのだろうか。先進国が開発途上国にしなければいけないこと、出来ることは何だろうか。

よく国際協力という言葉を目にするが、本当のことを言うと具体的にどんな事をしているのか私は知らなかった。今回このプログラムに参加して、いろんな形で援助が行われていることを知ることができた。

まず、資金援助をするだけではだめだということ。たしかに資金援助をすることも大切な事だけど、資金だけを援助してもそれを使う能力や技術がなければ意味がない。筑波国際センターには、いろんな国から技術を学びにきている人たちがいるが、彼らはきっと自国へ帰った後、日本で学んだ技術を家族や国のために生かしていくことが出来るだろうと思った。

私は、技術協力は、開発途上国から日本に来て学んでもらっているということより、日本から各国へ青年海外協力隊員として派遣が行われているという方を知っていたので、筑波国際センターのような所もあるのだなと思った。

家族を国に残して単身で学びに来ている人たちもいて、率直な感想で大変だな、早く家族に会いたいだろうなと思った。技術を学び国に帰り、その技術をまたそこで広めていってほしいと思う。

まだまだ世界には援助を必要としている人たちがたくさんいると思う。これからもっと、余裕のある国々はいろんな面で援助していかなければならないと思う。

国際協力について

秋田県立能代北高等学校 二年 武田 麻美

私は今回の研修に参加するまで、国際協力や青年海外協力隊などについて、全く無知に等しいようなものでした。研修に参加することによって、協力隊員がどんなことをしているのかなどを、少し知ることができ、とても良い体験ができたと思っています。

ところで、最近ニュースでJICAの活動をよく耳にします。トルコで起きた震災の救援に当たっているというニュースです。震災は大規模なもので、町は壊滅状態だという報道がされていました。そこで、日本をはじめとする各国が、トルコに救助に向かったそうです。

私はそのニュースを聞くまで、JICAがそのような活動をしていることを全く知りませんでした。研修の時には、緊急時に海外へ赴くということは何も聞いていなかったのものでそのことを知り、とても驚きました。

発展途上国の人々にとって、技術や知識を与えてくれる存在は不可欠だと思います。言葉や文化などの違いはあるにせよ、自国を豊かにしたい、発展させたいという気持ちは、きっとどこの国でも一緒なのではないでしょうか。

“国際協力”というのは、豊か、つまり、技術のある人がいて、知識のある人がいる国でなければ成功しないと思います。日本もかつては、外国から技術や知識を取り入れていました。それが、国民の手によって、日本独自のものになり、今日では、それらを海外に広くひろめています。

発展途上国がいつの日かすばらしい発展をとげ、他国から取り入れた技術や知識をさらに向上させ、世界中が豊かになるといいと思います。そのためにも、今なお世界中にたくさんある発展途上国に、技術や知識を与えていけたら、と思います。

今、自分にできることはと考えてみて、すぐには思いあたらないけれど、いつか、世界各国の途上に役立てたらと思っています。

国際協力について

秋田県立能代北高等学校 二年 村木 美沙子

今回の企画に参加して、世界に目を向ける自分の姿勢が変わった気がします。今まで、国際協力というものがどういったものか、特に理解もせず、ただの興味本位だけで参加したのが事実でした。行けばどうにかなるだろうと思い、事前に何か準備していたわけでもなく、しかもネパールという国の位置さえもわからないまま、企画に臨んでしまいました。でも私は、本当にすばらしいプログラムに参加することができたと思っています。JICAの方々や、協力隊の方のお話には、自分のイメージしていた世界とは違って、とても驚かされました。しかしそうだったからこそ、真剣にプログラムに参加し、モウジャ村について、国際協力について考えることができたと思います。

今、トルコでは震災の被害が大きく、大変な様子を毎日テレビで見ます。こんな時に、周りの第三者である私達に何ができるのでしょうか。この震災のニュースを聞いた時私は、すぐにJICAのことが頭に浮かびました。JICAの研修員の中にもトルコの人がいると思います。どんな対応をとっているのかなあと思いました。トルコの震災の例だけでなく、国際協力には、行動も大事だけど、私たちの気持ちも大事だと思いました。ただ、何かするのではなく、相手のことを考えて、自分にできることは何なのかを、まず考えなくてはと思います。

小さな私たちの気持ちや、心がけが、何かに形を変えて、国際協力になるんだと思います。

国際協力体験プログラムに参加して

福島県立石川高等学校 教諭 松本 聡二

はじめに…

このプログラムへの参加のきっかけは、我が校の国際協力活動の取り組みです。今春に JICA による「高校生ジュニア協力隊」に本校生 2 名が参加したことが大きなできごとでした。また、今夏には、国際交流クラブの先生がやはり JICA による「高校教師の海外派遣」でザンビアへ行きました。いくつかの面で、「国際協力」（または「国際理解」）に関心があり、そのための教育的活動もしてきたつもりでした。

しかし、今回のプログラムに参加するまでに、まだまだ JICA の活動や青年海外協力隊、ODA の現状など理解していませんでした。今までの活動は、学校全体としてではなく一部のなものであって、そして、理解度も浅かったのかもしれないかもしれません。痛切に感じさせられました。

学校紹介・自己紹介・各校の取り組みについて

急遽、引率教師からの参加者紹介となりました。しかし、事前に何度か発表の練習をしたこともあり急な変更は残念でした。予定が変わることはしょうがないと思いますが、その際の説明ももう少し必要だったと感じました。

日本語研修／懇親会／バレーボール

研修員の方々と親しくなるに大変良いきっかけだったと思います。英語の出来ない苦手な生徒達にとっても、苦にならないものでした。懇親会においても始めは恥ずかしがって食事をしているだけの生徒達も時間が経つと自然といろいろな国の研修員の方々と楽しく会話をしたり、写真を撮ったりしていました。または、その国の研修員の方の民族衣装を着ていた生徒もいました。バレーボールでも、研修員の方と協力して、白熱したゲームとなっていました。

ほんとうに生徒達の心の柔軟性というものを見せてもらった気がします。英語力がそれほど無くても、とにかくコミュニケーションを取ろうとする姿がすばらしかったと思います。また、研修員の方々の多くの親切にも感謝したいと思います。

国際協力ゲーム

今回のメイン・プログラムだったが、教員として大変勉強させていただきました。生徒達に「国際協力」を理解させるには大変良い手段だったと思います。あくまでも、主体を生徒達に置き、自ら考えさせるこのゲームはなんとか普段の授業にも取り入れることが出来たらなあと思います。

最後に…

今回のプログラムの経験を何らかの形で学校に、生徒たちにフィードバックさせたいと思っています。幸いにも、我が校には「国際交流クラブ」があります。現在は、韓国との交流に努めていますが、対象国ももう一步広げて行きたいと思っています。また、秋の文化祭においても発表展示などを通して今回の参加報告をしたいと考えています。とにかく、現在の私達の力では大きな事はできませんが、小さくとも具体的なことを見つけて、「国際協力」を少しでも肌に感じたいと思います。

国際協力実体験プログラムに参加して

福島県立石川高等学校 三年 荒川 正幸

一番初めに、このプログラムに参加してくれと先生から言われたときは正直断りました。しかし、結局参加する羽目になってしまいました。自分の参加するグループのメンバーを見てみると、自分以外は全員女性で、とても気まずい思いをするなど思いました。

しかし、実際プログラムに参加してみると、みんなと仲良くできて、楽しく時間が過ぎました。外国の方々とも一緒に食事をしたり、花火をしたりして交流も深まりました。

一番の思い出は、パキスタン人のシャヒドさんの部屋に遊びに行った時のことです。その時には僕は一人でシャヒドさんを訪ねました。そして、一人で四人の外国の人たちと会話して、言葉が通じたり通じなかったりしたことがありました。この事が自分にとって、大変よい経験となりました。

このようなプログラムを今後も続けて行って欲しいと思いました。

JICAの皆さんほんとはよい経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。

国際協力実体験プログラムに参加して

福島県立石川高等学校 三年 小針 礼之

自分にできる国際協力について考えてみました。

私は、夏休みにJICAの研修センターに行ってきました。研修施設で他国の研修員と交流をしたことが、国際協力の一つだと感じました。他国の人たちと自分の国の文化など自国のことについて話し合うことができればよいと思います。なぜならば、わたしにとっても他国のことが理解でき、と同時に勉強になると思います。そして、その国の人にも日本の本質的な部分（長所も短所も）を知ってもらい、それこそが、国際協力の第一歩となる、今回のプログラムに参加して気づいたことです。

私は現在学校で「国際交流クラブ」に所属しています。そこで私は、韓国の人たちと手紙で文通をしています。その中には、日本の文化や日本の事を書いて送っています。韓国の人からも返事もきました。まずは身近な国との交流をして行きたいと思っています。

これからも私にできる国際協力をして行きたいと思っています。

国際協力実体験プログラムに参加して

福島県立石川高等学校 三年 鈴木 由美

夏休みに2泊3日の「国際協力実体験プログラム」に参加して、その中で最っとも興味を持ったのは3つありました。

はじめは、「開発協力ゲーム」です。その中でも、村人へのインタビューが一番印象に残りました。この時は、インタビューを一緒に行った人が他校の人たちで、うまくグループに馴染めるかが心配でした。しかし、他校生同士グループの仲間としてまとまりが出来たので、インタビューもみんな考えて発表することが出来ました。

また、インタビューに答えるネパール人をJICAの方が答えて下さりました。その際、質問されたこと全てに的確に回答されたことが大変すばらしいと感じました。

次に、研修生の方々との日本語研修です。海外からの人々と会話するのに、うまく言葉が通じ合えるか不安を抱いていました。けれども、実際に会話と自己紹介をするときに、研修員の日本語と私の貧相な英語とそして体を使った表現などで何とかお互いに少しずつ理解し合えたことは本当に感動しました。

最後に、懇親会です。海外の人は日本料理をあまり好まないのではと思いましたが、懇親会では日本料理もおいてあり研修員の方々が好んで食べていらっしゃり、私も食事を楽しむことが出来ました。

今回、このプログラムの体験をして、私にできる国際協力は2つあります。それは、お互いに困ったことを助けることと、悩みの相談を聞いてあげることです。困ったことを助け合うためには、まず、お互いいろいろな交流を通して理解し合うことから始めるべきです。

また、相手の悩みなどを聞くことは、交流を通して言葉が少しでも分かれば話せるので、不可能ではないと思います。要は、心の問題なのではないでしょうか？

最後に、同じ体験に来ていた他校生や、日本に来て母国のために色々学んでらっしゃる研修員の人たちとの交流を通して大変貴重な経験をしました。ありがとうございました。

私が見つけた答え

福島県立石川高等学校 三年 三瓶ゆかり

日本が裕福な国だと思ったのは、二回目かもしれません。最初は、今年の3月にJICAの「高校生ジュニア協力隊」としてフィリピンに行ったときでした。

今回の機会で、他国から日本に来て勉強している研修員の人たちと会え、その中で、私自身が忘れていた‘一生懸命’ということの意味をまた思い出させてくれたような気がします。

また、開発協力ゲームにおいてネパールについて問題点を探し、その問題への解決点まで自分たちで考えた。問題点を探するのはとても簡単だった。なぜならば、私たちがもしそこで生活しようとしたら、何がある国の生活に必要なかを考えれば、すぐに問題点は山のように出てきました。しかし、限られたお金、技術で問題点を全て解決することは難しい。そして、最低必要なものを設定することしかできないことにより、今まで以上に問題点を直視するようになりました。

でも、それが、私たちの出来ることなのではないかと思いました。自分の国も大切かもしれないけれども、他国のことも自分の国のことのように大切に。言葉や文化、生活は異なるかもしれないが、自分の国が出来ることは他国に協力してやり、自分の国が出来ないことを他の国から教えてもらう。そんな国と国とのつきあい方、私たちと他の国の人のそんな関係、私はそのような国際協力が出来ればいいと思う。

この3日間で私が出した答えです。そしてもっと多くの国を知りたい。一人前の大人になったら、途上国で仕事がしたいです。自分の出来ることをやりたいです。それが私の夢だから……

今回、他校の人たちや、海外からの研修員と仲良くなれたり、JICAの仕事を理解したり、私が求めていた以上の答えを見つけることが出来たと思います。ほんとはよい経験をさせて頂いたと思います。いろいろお世話になりました。

5. 開発協力ゲームについて

1. 『開発協力ゲーム』のグループ別け
2. 開発協力ゲームの目的と内容
3. 開発協力ゲームの質問事項と状況説明のやり方
4. 開発協力ゲームのねらいと先生方へのお願い
5. 開発協力ゲームの時間配分
6. 「モウジャ」ってどんな所？
7. 登場人物のバックグラウンド

1. 『開発協力ゲーム』のグループ別け

第1グループ A (ピカチュウ) 黄色

指導者：小原 恵美子 先生		茨城県立石岡商業高校
生徒：小松崎 正樹	3年生 (男)	茨城県立石岡商業高校
	中里 円香	3年生 (女) 聖徳大学附属高校
	鈴木 由美	3年生 (女) 福島県立石川高校 (8月6日早朝帰宅)
	村木 美沙子	2年生 (女) 秋田県立能代北高校

第2グループ B (ルパンは日本茶が好き) 赤色

指導者：松本 聡二 先生		福島県立石川高校
生徒：小針 礼之	3年生 (男)	福島県立石川高校
	神野 郁恵	2年生 (女) 茨城県立小川高校
	黒井 和仁	3年生 (男) 茨城県立石岡商業高校
	山本 玲子	1年生 (女) 聖徳大学附属高校
	長谷川 彩	インター (女) 筑波大学

第3グループ C (The Young) 青色

指導者：伊藤 栄一 先生		茨城県立小川高校
生徒：柳瀬 良美	2年生 (女)	茨城県立小川高校
	野口 陽子	3年生 (女) 聖徳大学附属高校
	荒川 正幸	3年生 (男) 福島県立石川高校
	中川 幸恵	3年生 (女) 秋田県立能代北高校

第4グループ D (ドラエもん) 茶色

指導者：三浦 幸子 先生		聖徳大学附属高校
生徒：金子 久代	1年生 (女)	聖徳大学附属高校
	山王丸 絵美	3年生 (女) 秋田県立能代北高校
	中根 常美	2年生 (女) 茨城県立小川高校
	原田 正樹	3年生 (男) 茨城県立石岡商業高校
	三瓶 ゆかり	3年生 (女) 福島県立石川高校

第5グループ E (MARKN・マークン) 緑色

指導者：加賀 紀昭 先生		秋田県立能代北高校
生徒：武田 麻美	2年生 (女)	秋田県立能代北高校
	高木 梨絵	3年生 (女) 聖徳大学附属高校
	小林 克己	3年生 (男) 茨城県立石岡商業高校
	樫村 瑞希	2年生 (女) 茨城県立小川高校

2. 開発協力ゲームの目的と内容

1) 目的

高校生に対し、参加型ロールプレイの機会を提供し、擬似的に J I C A の調査活動を体験させる。

2) 状況設定

5 グループの高校生が突然、J I C A からネパールの山村に出張し、現地で何が問題で、どんな事が協力可能か、調べてきてほしいと依頼される。

行き先は南アジアのネパール、カスキ郡モウジャ村（小林花 O G の元の任地）。

3) ゲームの形式

高校生集団に質問を与え、答えをグループ内で検討しその結果を発表する。

適宜コメントを加えながらこれをくり返す。

最後に総括を行う。

3. 開発協力ゲームのねらいと先生方へのお願い

1) 開発協力ゲームの到達目標

参加者が、擬似的とはいえ異なる環境と文化の中で、自分達が自ら入手したデータを目的のため加工するプロセスに焦点を当てる。

従って、成果品については基本的にはその質について評価しない。

この観点から、先生方においては内部討論時に生徒の自主性を尊重して下さい。

2) 質問のねらいとその目的

質問 0 グルーピングが速やかに立ち上がるための助走です。
議長、書記、発表者を自分達で決めて、質問内容を議論する。
この機能を質問ごとにローリングさせる。

質問 1 グループが機能し始めの段階なので、軽めの設定です。
ただ回答の質は、国内で入手できる資料の確保程度と予想。
落差を埋めるため、講義を 2 本挿入します。

質問 2 このゲームが成功するか失敗するかの分岐点です。
一般的に情報の注入効率、画像 > 活字 > 口頭となりますが敢えて口頭インタビュー方式を選びました。
ビデオを見せて感想文を書かせる事にしなかったためです。

質問 3 ここでは、グループ内での議論の取りまとめ能力を見ます。
質問 2 と並び難箇所です。

質問 4 問題点を肯定表現にすると、現場に求められている開発計画になる事を理解させる事が目的です。
勿論、そのすべてを日本が協力する訳ではありませんが。

3) 時間配分が危ない場合の対処

質問 4 をカットして、総括時に説明する。

4. 開発協力ゲームの質問事項と状況説明のやり方

1) 質問1

あなたのチーム（5名）は、突然JICAから、南アジアのネパール王国に出張し、山村の事情を調査し、問題点を確認し、協力可能な内容を検討してほしいと依頼されました。

さて、出発までにどんな準備をしますか。

渡航準備、資金は全てJICA負担、回答内容は調査関連に限定。

この質問のみ回答あり。

講義の挿入

国内で収集可能な参考文献の確保。

統計で分かる事、分からない事

渡辺次長担当

統計資料と社会経済状況関連。

資料；(1) 日本とネパールの基本統計資料

(2) ネパールの社会と人々の暮らし

2) 質問2

さて、ネパールにやって来ました。カスキ郡モウジャ村です。皆さんの質問に答えるため、村長さんと郡開発事務所の担当者、村の有力者の奥さんと低カースト集団の奥さんの4人が集まっています。

各々の回答者に対しどのような質問をしたら良いか相談して下さい。

村長と担当官は渡辺次長が演じて質問に回答

奥さん2名は小林OGが演じて回答する。

配付資料：モウジャ村の基本データ（人口、地形、基本産業、カースト等）

質問に対し、各々の立場から回答し、質問がピントはずれのときは問題点を積極的にリークする。

3) 質問3

このヒアリングで皆さんはこの村のいろいろな問題点を把握したと思います。

まとめて発表して下さい。

各々発表

4) 質問4

問題点の発表ですから、全て否定的表現に（例：水場が遠く手間がかかる）なっています。これを全て肯定表現に変えて下さい（例：水場が近くなって労力が低減した）。いつの間にか最終目的の協力内容が見えましたね。

協力内容に書き直し、いくつかについて目標達成のための手段を考えて下さい。

プロセスと結果、系統樹は今回最小限に押さえる。

5) 質問5

それでは協力内容を発表して下さい。

各々発表

その後、渡辺と小林OGから適宜コメントの後、当該プロジェクトのビデオを見せて締めくくる。

5. 開発協力ゲームの時間配分

8月5日(木)

10:05-10:10	質問0	
10:10-10:25	内部討論	
10:25-10:30	発表	
10:30-10:35	質問1	
10:35-10:50	内部討論	
10:50-11:05	発表	
11:05-11:10	回答(渡辺次長)	
11:10-11:35	講義(数字から見えるもの、見えないもの)	渡辺次長
11:35-12:00	講義(ネパールの社会と人々の暮らし)	小林OG

休憩

13:00-13:05	質問2	モウジャ村の基本データ配付	
13:05-13:25	内部討論		
13:25-14:15	高校生からのネパール人への質問へ模擬回答		渡辺次長、小林OG

休憩

14:25-14:30	質問3	
14:30-15:40	内部討論	
15:40-16:00	結果発表	
16:00-16:05	質問4	
16:05-17:00	内部討論	

8月6日(金)

09:30-10:00	発表	
10:00-10:30	相互評価	

休憩

10:40-11:00	最終コメント	小林OG
11:00-11:20	当該プロジェクトのビデオ放映	

サブ プログラム終了

11:20-11:45	全体のまとめフォーラム	
	意見交換/先生方のコメント	

6. 「モウジャ」ってどんな所？

【所在地】

カスキ郡モウジャ村

【人口】

全人口： 2, 817人

世帯数： 452軒

男 女：男 1, 434人

女 1, 383人

出稼ぎ： 309人（主に、インド、イギリス、サウジアラビア、日本、シンガポール等）

【部族構成】

バフン族、グルン族、ネワール族、マガール族、職業カースト（低カースト）

【家族構成】

おじいちゃん・おばあちゃん・お母さん・兄弟姉妹（お父さんは出稼ぎ中）

【インフラ整備状況】

電気：9区ある内1区に最近水力発電で電気が通るようになった

水道：水源からパイプを通した簡易水道

学校：小学校 5校（1年～5年生）

中学校 } 1校（6年～8年生）

高校 } 1校（9年～10年生）

【主な収入源】

農業（90%）主な生産品：米、ヒエ、菜の花、トウモロコシ

学校の先生

家で作った野菜等を町に売りに行く

平均月收入＝Rs.600（約1,200円）

7. 登場人物のバックグラウンド

1. 村長

部 族 グルン族

教 育 SLCパス

仕 事 イギリス軍に出稼ぎに行っており、15年働いた後定年退職し、その後村に戻って農業をしている。知識人と言うことで選挙に出馬し当選した。

ジェンダー 外国の世界も知っているのですが、女性の社会進出やカースト制度について問題だとは思っているがモウジャの女性は教育を受けていないし、海外の女性とは別だと考えている。

村の問題点 村の問題点は自分が全部知っている。でも、一番最初に解決しなくてはいけないのは自分の農地の横に発生している地滑りを何とかしてほしい。脱穀機を買いたいので出来たら電気もほしい。

2. 役 人

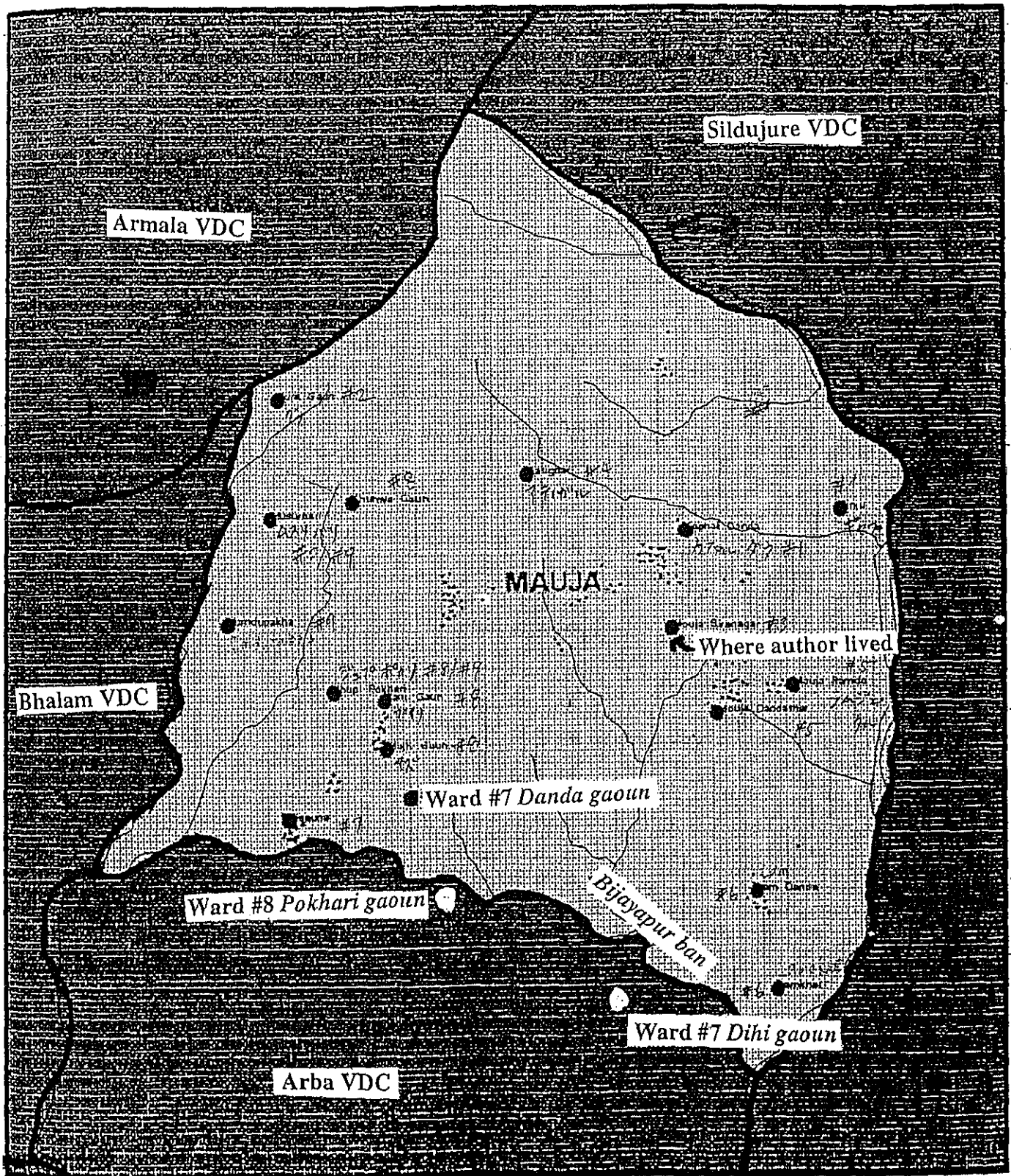
部 族	バフン族
教 育	大学卒
仕 事	HMGのシニア役人、現在カスキ郡の土壌保全事務所で働いている。
ジェンダー	もともとカトマンズ出身。村で生活した事はないが、最近モウジャの担当になった。モウジャまでは遠くて行きたくない。村人と自分は住む世界が違うと思っている。村の女性とはお茶を頼む時以外話さない。職業カーストなどなおさら話さない。
村の問題点	村の事はよく分からないが、村長が地滑り修復と電気が問題だと行っている。

3. 村の女性

部 族	グルン族
教 育	3年生まで（読み書き、そろばんが出来る）
仕 事	農業。夫はインドに出稼ぎ。
ジェンダー	夫に捨てられたら自分はどこにも行くあてはない。息子が生まれたときは「これで夫に捨てられる事はなくなった」とすごく嬉しく思った。男女の差、カーストの差とは言う難しい事は分からないが、自分は女の子だからと言って学校を中退させられたのが今でも悔やまれるので自分の子供は学校へ行かせたい。
村の問題点	子供の将来の為にも学校の校舎を立て替えてほしい。それから、女性グループの活動のため、近くの鎮守の森にお寺を建てたい。

4. 職業カーストの女性

部 族	職業カースト
教 育	識字力なし
仕 事	裕福な家庭に働かれている。
ジェンダー	自分はずっと不浄だと思って育っている。自分の意見など求められた事がない上、自分の生活の安定の為に絶対上のカーストには逆らわない。
村の問題点	村の問題点など考えたことはない。でも、水は困る。いつも1時間以上遠いところまで汲みに行っている。子供も学校に行かせたいが、夫が病気がちで働き口がないので今は一緒に農作業に行く。このごろ自分の体調も良くないけどどこへ行ったらよいか分からない。



Armala VDC

Sildujure VDC

Bhalam VDC

MAUJA

Where author lived

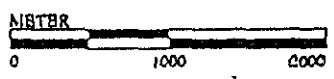
Ward #7 Danda gaoun

Ward #8 Pokhari gaoun

Bijayapur ban

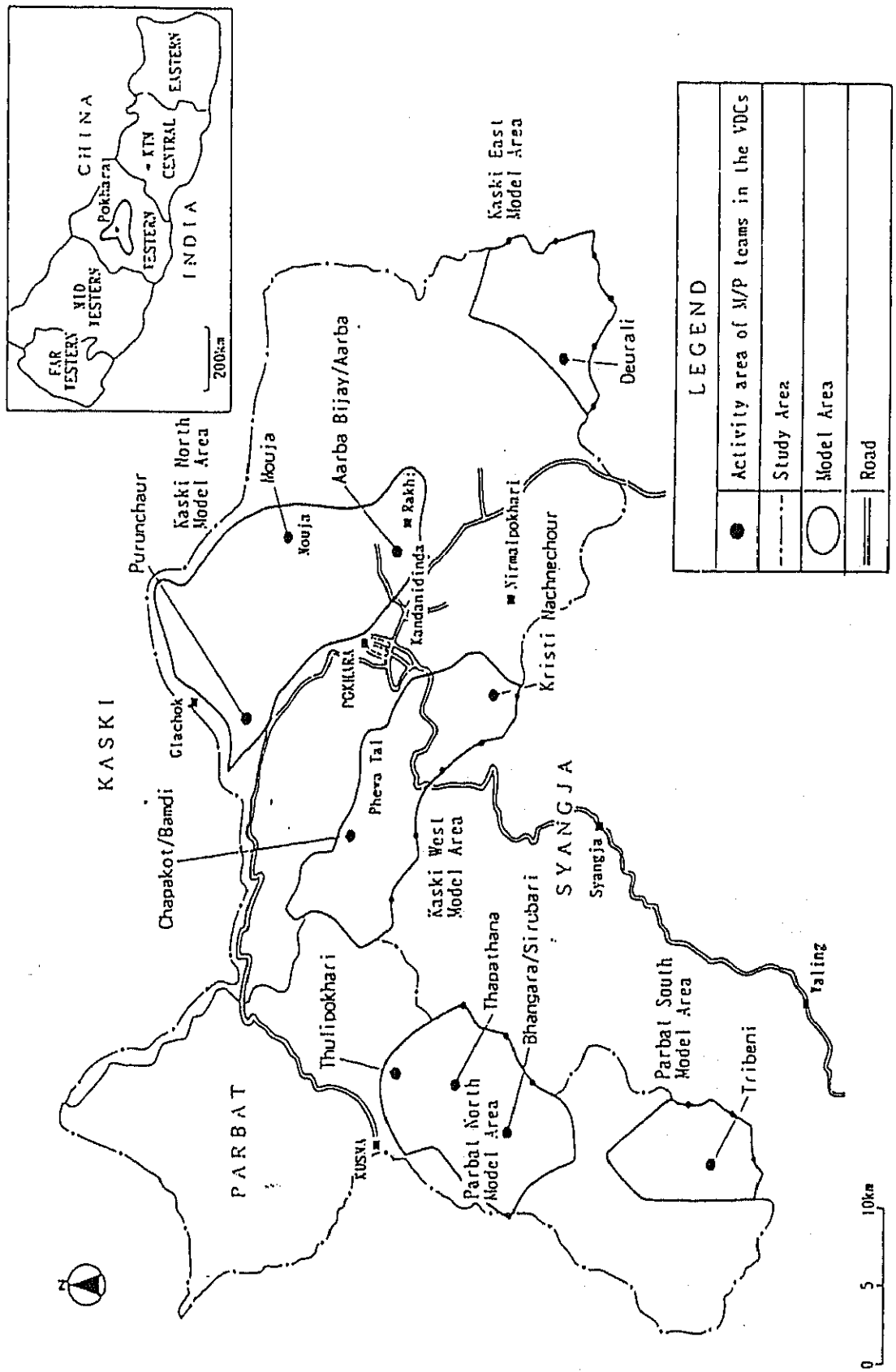
Ward #7 Dihi gaoun

Arba VDC



Handwritten mark resembling the number 77.

プロジェクト活動地域



6. アンケート集計結果

プログラムについて

1. 実施時期はいかがでしたか？
 - 1) 特になし 4校
 - 2) 7月30日から8月5日の間くらいで 1校
2. 各プログラムについて
 - 1) 学校紹介・自己紹介
 - ①予定変更となって教員が簡単に説明しましたが、もう少し詳しく話しておけばよかった（後でまた話す機会があると思っていた）。
 - ②事前通達でどのようにやるのか、絶対やるのか、明確な情報が無かった。急きょ方法を変えてしまったのは残念。
 - ③少し機械的すぎたように思われました。
 - ④時間の都合で、教員からの紹介となったが、せっかく準備してきた生徒のこと、また本人同士の交流ということを見ると、生徒たち自身にやらせたかった。またどのような形式でやるのか事前に知らせてほしい。
 - ⑤「英語で3分間自己紹介」を生徒たちは必死に準備していました。予定を急変するのは生徒たちを落ち込ませます。ただし、「英語で3分間自己紹介」に賛同しているわけではありません。
 - 2) センター施設見学
 - ①とても丁寧に隅々まで案内して頂いたのでセンターの施設のことが良くわかった。研修員が実際に作業している所も見る事ができて良かった。
 - ②ほとんどの植物が最盛期を過ぎてしまっていて、残念であった。それ以外の手段などは申し分なく、説明も丁寧であったと思う。
 - ③生徒たちは暑くて多少疲れていたせいもあって、退屈そうに見えました。
 - ④各見学場所で皆さんが親切に対応して下さりありがたく感じた。特に、農産物開発については今後のプロジェクトのヒントになったと思う。
 - ⑤もう少しコンパクトにした方が良くと思います。
 - 3) 講義「開発途上国の現状と日本の援助について」
 - ①今後の作業の予備知識として大事な話でしたが、生徒には少し難しく感じたようです。
 - ②もう少し高校生レベルで話して頂けたら良かった。話し方、内容的にはすばらしかったと思う。
 - ③個人としては、話の内容も明快で、興味深いものでしたが、生徒には少し難しかった。
 - ④今後のプロジェクトに向けて役立つヒントとなったと思う。時刻的に、生徒に疲れが出たようです。
 - ⑤Introductionとして適切だったと思います。
 - 4) 日本語研修参加
 - ①参加型の活動に生徒は積極的な態度を見せるので、いきいきと参加していました。ひとり一人、研修員が相手をして呉れたのでとても良かった。
 - ②大変良いプログラムだったと思う。もう少し発展させ他のActivityを入れても良いかも？
 - ③Foreignersと直接話せるということで生徒たちは生き生きとしていた。
 - ④研修員の方々とリラックスした雰囲気ですることができ、大変良い企画だった。活動も一人一人が積極的に参加できるものでこの後の懇親会へ良い流れができた。
 - ⑤動きのある活動で楽しめる内容であった。
 - 5) 研修員との懇親会
 - ①立食パーティー風で自由に動いて話すことができたが、内気な生徒にとっては、動きつらそ

うであった。

②多くの国の方とあれほど会話を持つ機会は滅多には無く、たいへん良い経験であった。研修員の方も日本語を話して下さるので、我が校の生徒たちも助かったと感じました。

③Splendid!

④日本語研修を通して打ち解けた雰囲気が出ていたため、大変なごやかな楽しいひとときになったと思う。花火も良かった。

⑤研修員の方々がとても親切で好印象。花火も良かったです。

6) 青年海外協力隊OG体験談

①とても興味深く生徒たちも熱心に聞いていた。やはり実体験というものは説得力があると感じました。

②生きたお話であり、大変分かり易かったと感じた。できれば、もう一人位男性とか年齢の違った方や、別の体験談も聞きたいと思ったが、時間的に無理でしょう。

③本人はもちろん、海外派遣に協力した家族の方の勇気と理解に感動しました。

④スライドなども使って頂き、大変興味深く聞けたようです。一般論より、個人の体験に基づいた話は、真実が伝わって感動するものも多いと思います。

⑤「どうして青年海外協力隊を志したのか」についてももう少し話すと生徒たちは興味を持ったと思います。

7) 研修員とのバレーボール親善

①どの生徒も参加することができ、研修員とも自然に接する機会となり、楽しめた。一般楽しそうだったようです。

②誰もが楽しかったのでは？今まで頭ばかり使っていたので皆リフレッシュには最高のプログラムでタイミングも良かったと思います。ただ、3セットマッチは長すぎ21点制も15点制にした方が良いと思います。

③楽しかった反面、研修員の余りに勝利にこだわったプレーに同じチームでやっていてしらけたのも事実でした。

④楽しい雰囲気と研修員とより深く交流する機会が持てたと思います。残念だったのは、ルールやセット（試合時間）にもう少し改善が必要かと思うことです。待ち時間が長いと退屈してしまう。

⑤良好。

8) まとめフォーラム

①今までの活動の総まとめとなり、生徒も主旨を理解できたと思います。

②特にありません。

③開発協力ゲームの立案が素晴らしかった。ただ、時間の制約とある程度発表の形を整えるためもあってか、指導に当たられた方が数人で一つのグループにアドバイスをすることが、生徒たちの思考プロセスを中断することに繋がった面もあったようです。

④時間的にも内容的にも簡潔で、主旨が伝わりやすかったと思う。生徒たちからなかなか意見が出てこなかったのが残念だったが、やはり、全体の中で一人で意見を言うより、グループワークの中の方がやりやすいのだと思う。グループリーダーにまとめてもらうやり方でも良かったと思う。

⑤高校生のパワーを感じ、あらためて「高校生は捨てたもんじゃない」と思いました。

7. 平成11年度「高校生国際協力
実体験プログラム」写真集

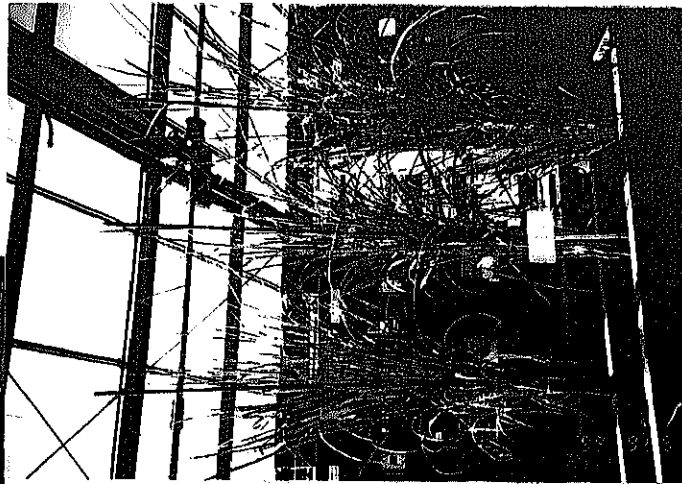
平成11年度「高校生国際協力 実体験プログラム」写真集



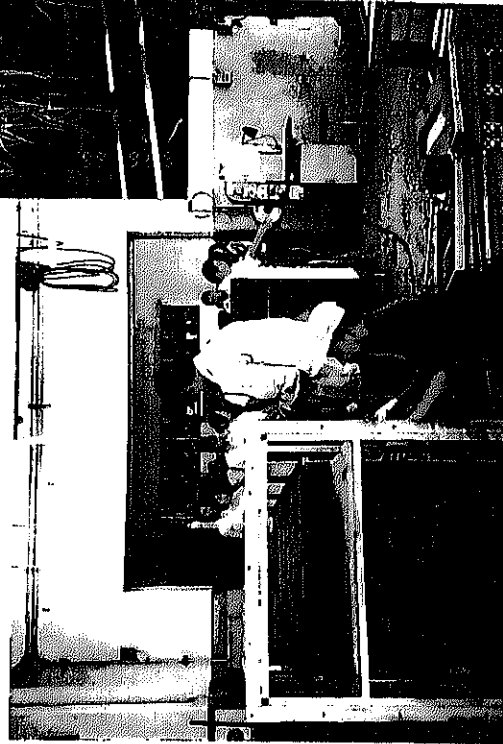
平成11年度「高校生国際協力実体験プログラム」参加者



筑波国際センターの施設見学（稲作棟）



日本では珍しい「浮き稲」

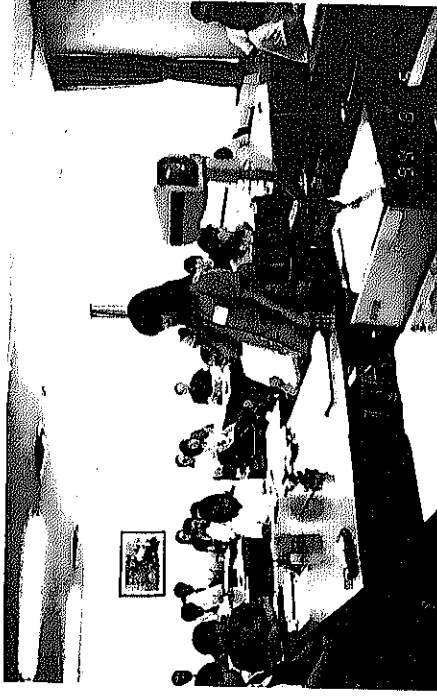


研修員が自分の国に合った農業機械の製作に励んでいる実習風景

「国際協力に携わって」講師：片山国内協力員)



「開発協力ゲーム」の進め方について、講義を聴く高校生のみなさん



「開発協力ゲーム」に対する取組の質問をする三瓶さん



「開発協力ゲーム」のテーマ：モウシヤ村・村長の答弁



始まった国際協力実体験プログラムの講義を熱心に聞いている高校生



プログラムのひとつ「日本語研修に参加」講師：宮本先生



マンツウマンでの熱心な交歓風景（柳瀬さんとエティオピアのツツアさん）



マンツウマンでの熱心な交歓風景（小松崎君とアルジェリアのメツレアさん）



マンツウマンでの熱心な交歓風景（二瓶さんと韓国の英さん）



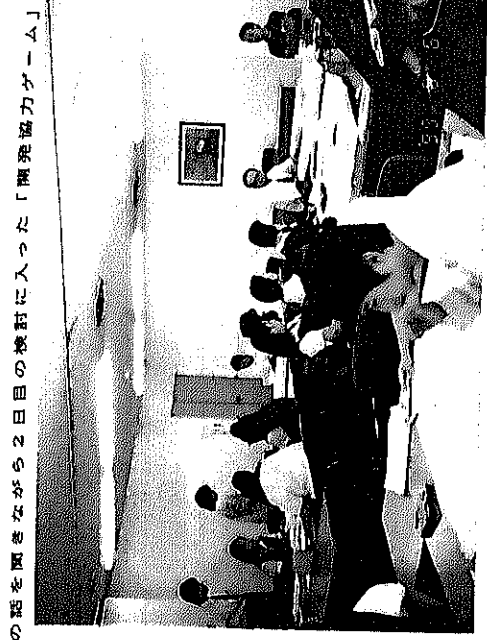
熱心にモジレーターの話に聞かいる「ヒカチュウ」グループ



調査結果を発表する「ルパンは日本茶が好き」グループ



研究成果を発表する「ヒカチュウ」グループの鈴木さん



モジレーターの話聞きながら2日目の検討に入った「開発協力ゲーム」



「高校生国際協力実体験プログラム」参加者と研修員との懇親会風景



とりあえず、おなかに物を入れてから

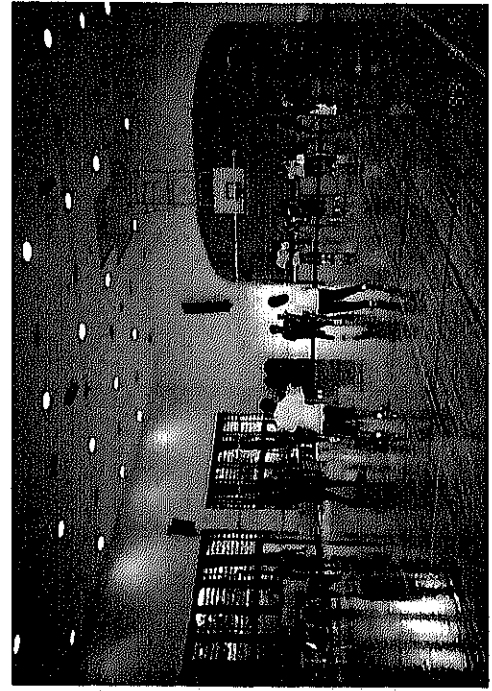


懇親会を和やかに過ごす高校生・研修員

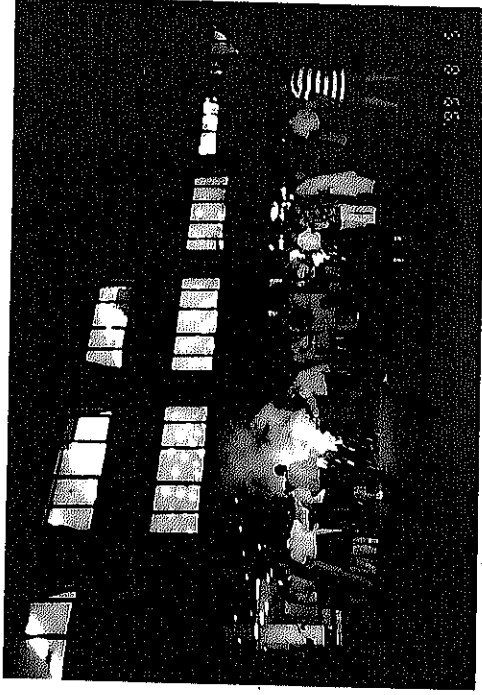


さてゆっくり歓談を

交流「バレーボール大会」



交流「バレーボール大会」、さて誰のエラーかな



歓談の後の「花火会」、研修員は日本の花火に、大はしきぎ!



花火をかかけて「歓迎のあいさつ」

8. 「高校生国際協力実体験 プログラム」の新聞報道

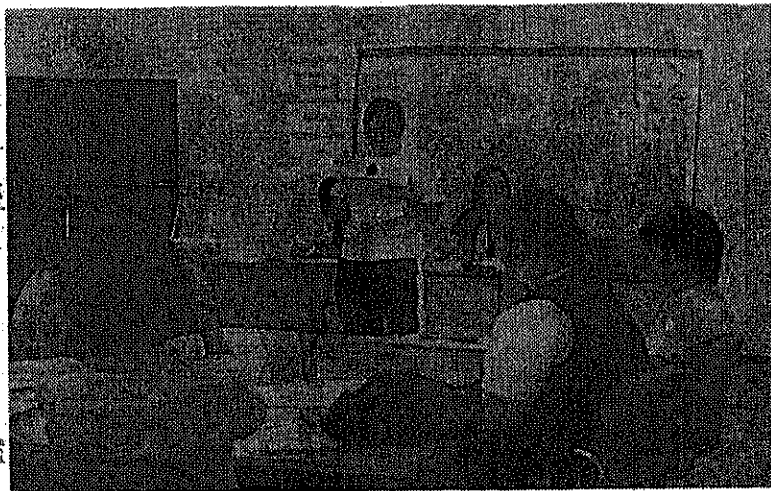
常 陽 新 聞

常陽新聞

発行所 常陽新聞社

本社 〒300-0051
 土浦市真鍋2丁目7番6号
 電話0298-21-1780(代)
 F A X 0298-22-6743
 水戸支社 〒310-0063
 水戸市五軒町1丁目5番48号
 電話029-221-6420(代)
 F A X 029-221-6474
 東京支社 〒104-0061
 東京都中央区銀座2-10-8
 大日本ビル3階
 電話03-5565-0530
 F A X 03-3543-3478

©常陽新聞社 1999



グループの意見を発表する高校生

国際協力へ理解深める

高校生ら熱心に意見交換

JICA筑波国際センター

つくば市高野台の国際協力事業団(JICA)筑波国際センターで四日から三日間、「高校生国際協力実体験プログラム」が実施され、高校生が国際協力について学んだ。

開発途上国からの研修員受入れ事業を行っている同センターで、研修員との交流や国際協力事業現場を体験し、国際協力への理解を深めてもらうことが目的。

徳大付属聖徳のほか、JICA二本松訓練所管内一校(福島県立岩川)、同東北支部管内一校(秋田県立能代北)の五校から二十一人が参加した。

「二週間後にネパール発つとしたらどんな準備をするか」の設問に、「本やインターネットなどでネパールの生活文化、宗教、気候、地形などを調べる」「現地の人々に必要なものを用意する」「持参する常備薬、食料を整える」などと発表。渡辺次長が資料を示しながらネパールの実情

を説明すると、議論内容がさらに具体的なものになり、二日間にわたり熱心に意見交換した。

このほか日本の国際協力の実状や青年海外協力隊員の体験談などの講演、外国人のための日本語研修、研修員との親善バレーボールや懇談会など、さまざまなプログラムに取り組んだ。

興立小川、岡石両商、理

